感情の存在論的構造（承前）

島　芳夫

六

感情の價値志向性が肯定されるとしても、情意的價値の存在は一體如何に考へらるべきであらうか。感情の主觀性は、感情に價値志向性と云ふ特殊のノエシス・ノエマの構造を認めるだけで明かにされるであらうか。感情の主觀性の見地からは、情意的價値のノエマ的存在とはどう云ふことであらうか。感情のノエシス的構造の追究は單にノエマとしての價値の前に立止るのでなく、更にノエマ的價値の背景たる深き主體的根據の追究に進むべきなのではなからうか。

人は感情は主觀的だが、價値は主觀的でないと云ふかも知れぬ。實際價値感情と價値とを混同する所に價値心理主義が存在するのである。例へばヒュームによれば、道德的價値は單に對象の關係にも又單なる事實にも存するのでなく、我々自身の心への反省、卽ち對象の狀況に對する快不快の

感情に基くのである（Treat. o. h. nat., II, p. 177）。此ヒュームの主張は半ば眞理、併し半ば誤りである。成程價値は彼の云ふやうに、對象の中に見出されるのでなく、我々自身の中に見出される。併し此「我々自身の中」とは單に感情の中に存すると云ふことではない。價値對象は作用に內在的であるとしても、作用と異る非實在的存在をもたねばならない。併しながらこれは、價値の存在は一般に人間的主觀に超越的イデア的存在をもつと解されてはならない。それでは價値の存在はどう云ふ意味で主觀的なのであらうか。

リップスは快不快の感情の發生を人間の本性との一致、不一致の關係から說明した。リップスの此 menschliche Natur の解釋は明かに心理學的解釋に止まつてゐるが、併し感情の說明に屢々利用される此「人間の本性」と云ふ概念はもつと廣く存在論的解釋を受け納れることが出來る。事實アリストテレス乃至スピノザの場合に於ては人間存在の本性 physis, natura から感情の存在の仕方が解釋されてゐる。だから此ことは又結局價値の存在は人間存在の本性、心理的物理的統一としての人間性に基くことを暗示するのである。而して感情の主觀性は單に心理的主觀性を越えて、それが志向する價値の斯くの如き存在論的主體性の情緒的反映に外ならない。價値感情は對象を人間存在の本性との關係に於て評價する。價値の意識は評價作用によつて始めて可能であるが、併し價値と價値感情の構造とは根本的には人間性の存在論的解釋によつて明かにされねばならぬ。

さて價値感情に於て表現される人間の本性とは何であらうか。先づ本性とは人間に於ける自然であり、換言せば身體である。プラトンは身體の自然的狀態卽ち調和が破られる時不快を生じ、自然に歸る時快を生ずると考へた。故に感情は身體のゲネシスに屬する。而して身體のゲネシスに屬するものとして感情は受動的狀態を現はすとされ、パトスと考へられる。近世に於てデカルトが感情は能動 action に對する受動 passion に屬すると考へ、斯くの如き受動は心によつて直接に左右出來ぬ所謂動物精氣の運動であるとした (Descartes, Les passions de l'âme. p. 28)。併し感情は必ずしも斯く身體の運動に還元されなくとも、それ自身受動的であり又同時に人間存在一般の受動性、被投性を現はすと考へられる。人間存在の被投性、運命性は總ての人間の有り方、たとひ最も創造的な活動と雖もこれを規定してゐるが、狀態性として特色附けられる感情に於て特に此規定が顯著である。感情は云はゞ意識の波動であり、不回避的な力を以て我々の心の全體に震動を傳へゆき、而して斯くの如き震動の停止は偶然か時の變化に任す外なき場合が多いのである。此樣なそれ自身被投的存在なる感情は又一般に人間存在の被投的本性を非本來的或は本來的な形で顯はにする。それは感性的快不快から實存的有限性に對する不安、elegisch, pathetisch な宇宙的無常感に至るまでの體驗層を包括してゐる。さればフィヒテの考へたやうに、感情は意志の能動性に對する被制限性を現はすと考へてよいのである。人は屢々斯くの如き被制限性を人間の中の感性的又は模寫された

自然 natura ectypa と呼び、より高き原形的自然 natura archetypa と對照させる。併し我々は此人間存在の兩本性に單に觀念論的價値判別を加へてはならない。我々は被投性が如何に深く人間のあらゆる存在の層の中へ食ひ込み、人間の實踐の否定的媒介契機として働いてゐるかを知らねばならぬ。而して自由と必然の矛盾と統一の最も深き現實的體驗たる悲劇乃至崇美の感情が單に美的感情たるに止まらず、人間の存在と行爲の構造を現はしてゐることを知らねばならぬ。

併し感情を其被投性に於て理解することは感情の存在論的規定の全體を盡すものでない。それは恰も感覺が廣義の受動(パトス)に屬しながらそれ自身感覺作用として活動を表現してゐる如く、感情も矢張り評價作用、態度のとり方としてノエシスに屬するのである。それは云はゞ受動的能動、被投的創造作用と云ふことが出來よう。フッセルが感情をもノエシスと見、其ノエシス的性格の記述の必要を示唆してゐるのは注目さるべきことである(Husserl, Ideen, §121)。而して斯く感情のノエシス的性格の力說は、感情を人間的本性の表現と解する我々にとつては甚だ意味あることである。蓋し人間の本性は生きることにあり、而して生きるとは單に被投的に生きることであるのみならず、又投企的創造的に生きることであり、寧ろ後者の生き方に人間存在の本性が存すると考へられ、而して斯くの如き生き方は單なる質料的自然に對する「心(プシケ)」に屬するとされた。されば感情は單に運動として身體に屬するのみならず、志向的體驗として、エネルゲーヤとして心に屬する。而して作用とし

ての感情は價値を見出し又創造する働きをもつ。

だが若し人間の本性が作用、活動にあるとせば本性に根據をもつ價値の本質は、リップスの云ふ如く又活動價値に存せねばならぬ。生の價値たる價値一般は質料價値なると共に活動價値であり、前者より後者への次元の轉換に價値の向上と深化とがある。休息も單なる靜止でなくて力の均衡かそれとも休んでゐるエネルゲーヤである。さて感情がそれ自身作用であるとせば、それは又それ自身作用價値を創造する力を持つが――從つて我々は斯くの如き感情に對して又價値を感ずることが可能であるが――併し感情は又感情以外の諸活動、行爲、乃至對象に對して其中に價値を見出し、此價値體驗の力によつて更に新しき價値創作の拍車となる。斯く自らによる價値創造と他に於ける價値發見と云ふ二重の活動價値の體驗に於て感情は主體の最も深い中心に觸れたのである。リップスの感情論の大きな功績は、此樣な感情と活動體驗の間の從來見逃がされ勝ちな關係を明かにした點にある。

併しギリシャに於ても感情は單に受動としてのパトスとのみ考へられてゐなかつた。プラトンが感情のテュモス的性格を力說し、道德的價値への情緒的志向性を認めたのは其一である。エロースは又價値一般への志向を意味した。又アリストテレスが快と活動（エネルゲーヤ）との不可分離の關係を力說したのは其二である。

我々はリップスの云ふ如く、生の本質は活動にあり、單なる受動性と見ゆるものも能動性を含み此二者は相互に離すことの出來ぬ關係にあることを知らねばならぬ。例へば對象を感覺する作用は明かに對象を受けとる受動性をもつ。而して此感覺に伴ふ快は、其對象が受動的に與へられたと云ふ點で受動的であると云ひ得よう。併し此時の快は單に對象それ自體から生ずるのでなく、對象の要求する統覺作用と其仕方に基くのである。卽ち此場合體驗される價値は對象に於て實現される主觀の活動價値である (Lipps, V. Füh. Woll. u. Denk., S. 228)。同樣に知識に對して感ずる快感の中にも活動價値體驗が重要な役割りをもつてゐる。知識を喜ぶ感情の大きな原因の一は努力、勞働、自由な活動にあると思はれる。アリストテレスの考へた如く、生の存在の仕方は活動(エネルゲーヤ)に存し、思惟も亦斯くの如き活動として最も深い快、幸福を與へるのである。それは最早運動でなくて活動と同じやうに分割出來ぬそれ自身完成した全體者であり、活動と同じではないが而もそれと密接に結合し且それに類似し且活動を完全なものにするのである (Eth. Nic., X, 3—5)。此樣な知的快感はデカルト、スピノザに於ての理性の能動に伴ふ知的感情に外ならず、而して又ベルグソンが表面的昂奮から嚴しく區別した深い創造的感情に屬すると考へてよいであらう。

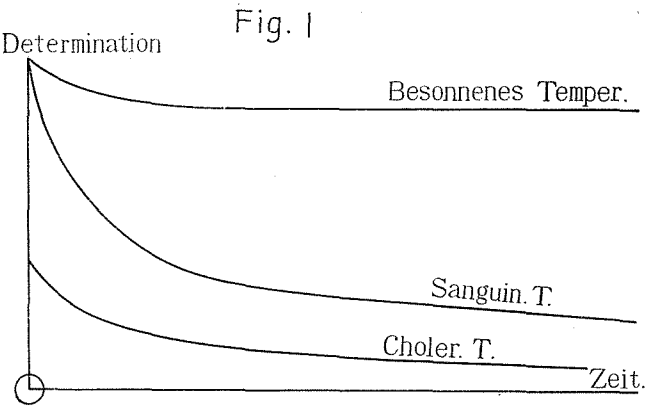
さて若し感情が評價作用としてそれ自身一つの活動に屬し、又活動價値を志向するものならば、我々は感情と行爲との間に深い聯關あることを推し得るのである。元來感情は廣く價値體驗として

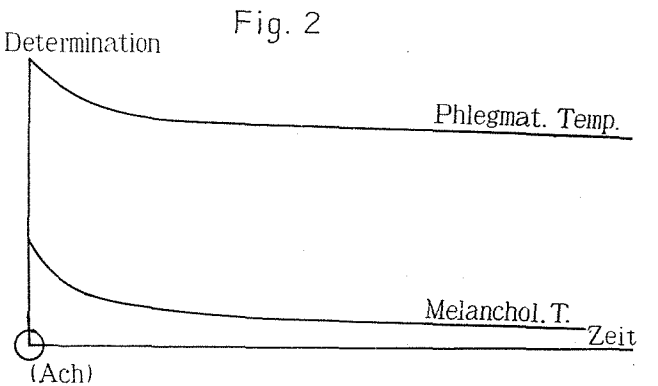
行動の不可缺的契機であるが、それが活動價値體驗なることによつて愈々行爲と深い關係をもつことが理解される。感情は價値一般に對する主觀の態度、作用なると共に活動價値への志向としてそれ自身行爲への傾向を含んでゐる。此傾向の有無によつて狀態感情と努力感情とを分けることが出來よう。例へば希望の感情に生きる人は生活への努力を強く感ずるであらう。ヴント、マクドガル、シェーラー等はそれぞれ感情と行爲との關係を明かにした。

七

固より行爲を規定する感情の實踐的意味を力說することは行爲を例へばヴントの如く激情の發展とのみ考へ、行爲の意志的理知的契機を輕視することであつてはならぬ。形而上學的に絕對化された意志乃至理性能力を以て行爲の原理と考へ得ないこと、行爲は人間性の全體的表現なることは勿論であり、又行爲の類型——例へばシラーの「典雅」と「莊重」の類型——の差異や個人的素質の差異——粘液質、膽汁質、多血質、憂鬱質——に應じて行爲を規定する主要能力の異るは當然であるが、行爲の究極的決定者は意志、廣く欲求能力にあることは明かであらう。意欲することは感ずることと同樣に根源的な評價作用であり、情緒的價値志向に媒介されると共に固有の價値志向の秩序をもつと考へられる。例へば我々は生れながらにして知ることの喜び、新しきものに對する驚異の情を

もつと共に知ることを求める本能をもつ（好奇心）。本能より高等な行爲に至るまで人間の總ての行動は認識的、感情的、意欲的三方面の綜合運動であるが、併し行動の直接的動力は意欲にある。否感情の餘りに強い昂奮は行動の組織立てを不可能ならしめ、目的の堅實な追求の妨害になる。アッハは行爲の主要精力を意志の決定にありとなし、而して此決定力は感情的刺戟の強い素質には時間的持續性がないとしてゐる（Ach, Über den Willen, S. 19 ff.）。





（横線上には時間、縱線上には決定の強さが記される。カーヴによつて時間の經過に伴ふ決定の變化を示す。）

併し感情は活動價値體驗と云ふ努力感情的特色に基いて一般に活動を喜び、而も活動に對する抵抗が大であるだけそれだけ機能快感を促進する傾向を具へてゐることも見逃すことは出來ない。意志の決定と緊張力がより強く、而して此意志の力の強さはそれに對抗する障害の強さに依存するから、又此對抗の力が強い程、目的達成の際の快感が大である。尙又不成功の場合の不快、憤りは精力の堰止めを可能ならしめることによつて更により強き決意と行動への拍車になる。斯くして最後に目的達成と共に勝利者としての力の意識、可能の意識卽ち生命感情の昂揚、誇りを感ずる（Ach, Über den Willen, S. 13—15）。されば快不快は共に力と鬪爭の感情として意志決定と障害の力的關係の Funktion の意味を擔つてゐる。プラトンの所謂感情のテュモス的性格は斯くの如き感情の力的性格を意味する。

併し上に述べた如く、感情の行爲に對する影響は常に促進的であるとは云はれないので種々の場合が考へられねばならぬ。第一の場合は行爲を規定する感情が激しき感情 violent passion（ヒュームム）の場合である。一般に激情（愛憎、悲喜、誇り、謙遜）は價値の對象が己れに近い時生ずるが、此近さと力强さの爲に我々の行爲の動力となる。斯くの如き激情は既に我々が指摘せる感情の全體性的性格によつて他の同時的感情を併呑し、それだけ强くなつた力を以て意識の全體を占領し行爲の支配的動機になる傾向をもつてゐる。斯くの如き激情の心理を利用するのが民衆を行動に驅り立

てんとする政治學の一つの技術と見做されてゐる(Treat. o. hum. nat., II, pp. 130—131)。

併しながら第二に行爲を規定する感情として穩かな感情 calm passion がある。それは心中に激しい動搖を生せしめざる感情で道德的美的感情乃至若干の先天的感情——生命愛、子供に對する親切等——がこれに屬する(Treat. o. hum. nat., II, p. 4, 129)。一般に知的感情、乃至深さをもつ感情と云はれるものもこれに屬する。さて此感情はたとひ表面的に激しさを伴はぬにしても——尤も穩かな感情と雖も屢々激情に發展し得る故兩者の區別は絕對的でないが——行爲を規定する力をもつてゐる。否ヒュームが正當に述べてゐるやうに感情の激しさ、靜かさと其强弱とは同じでない。寧ろ永續的にして創造的な行爲を規定する感情は表面的な騷がしさよりも穩かにして而も深く且力强い感情である。表面的女性的感情は行爲を徒らに混亂に陷らしめるか、それとも一時的な行爲を伴ふに過ぎない。創造的行爲には熱狂は禁物である。ベルグソンの云ふやうに、創造的感情は女性的表面的昂奮でなくて反省と努力とを含む深い感受性である(Bergson, Les deux sources de la morale et de la religion, pp. 41—44)。

周知の如くカントは道德的行爲に對して Schwärmerei と Enthusiasmus とを排し、思慮あり且確固たる決意をもつ Gemüt in Ruhe を德の眞の强さとした。道德的感情と雖も感情の心理としては激情へ高められる傾向をもつが、併しそれは持續的で深みをもち、均衡と節度を失はないことを特

色とする。若し斯くの如き心の態度を一般に倫理的意味に於ての性格又は慣習と云ふならば、道德的感情も亦慣習に屬さねばならない。アリストテレスは感情に斯くの如き慣習 hexis を與へることを實踐的德の目的として力說した。一般に慣習は繰返へされることによつて永續的になり、又それだけ深く植附けられた心の傾向であるが、感情にも善惡何れにせよ此種の慣習が存在する。此意味でリップスやクリューガーが感情に深さの次元を認めたのは注意さるべきである。我々は表面的に動き易い感情以外に人格の體驗の深みに根差す持續的で力强い感情の存すること、而してそれが强い決定を與へることを知らねばならぬ。古來慣習は情熱を殺すと云はれた。併し我々は能動的慣習と受動的慣習とを分けねばならぬ。前者は自由な熟練 freie Fertigkeit, habitus libertatis (Kant, Metaphysik der Sitten, S. 241) で後者の單なる單調な機械的反復と異り、主觀自らの欲する活動の容易さと自然さ(第二の本性となれる慣習)に外ならぬ。斯くの如き慣習は主觀の自由な妨害されざる活動を可能ならしめるものとして我々に喜びを與へ、活動に愈々新しい力と生命とを與へる。それは自己が行爲と調和し、行爲に於て己れを見出す喜び、云はゞ「美しき魂」の喜びであり、斯くの如き習慣の喜びを感じ得ない人は未だ眞に道德的になつてゐない人である。例へば官能的享樂を制し且斯くすることに喜びを感ずる人は節制ある人であるが、これに不快を感ずる人は無節制な人である (Eth. Nicom., II, 2)。斯く道德的習慣には深い永續的な喜びを伴ひ、而してそれが昔から永遠に

變らぬ至福と考へられたが、併し道德的習慣は單に感情によつて獲得されるのではない。感情に正しい中を與へ、此中を維持させることによつて習慣を形成させるのは理性と意志に負ふ所が多い。感情を秩序附けることは感情と戰ふことによつて可能である。行爲の秩序ある遂行には盲目的感情に驅られない判斷と習慣と術とが必要である。而も斯くの如き慣習による感情の否定はそれが一般に慣習なることにより、而してそれが感情の慣習である場合にはそれだけ高次の感情の形成を豫想するのである。例へば習慣としての勇氣は單なる中の理性でなくて、無謀と臆病の中の原理に基く綜合的感情であり、而して又慣習としては喜びを伴はねばならぬのである。

我々は感情の主體的深化の方向に於て、それが活動價値の體驗に歸着することを見出した。だが道德的價値感情は單に個々の活動價値の體驗に存するのでなくて活動價値の全體的秩序に於ての體驗であり、而して活動の統一を人格と云ふならば道德的價値感情は人格價値感情に存すると云はねばならぬ。さてリップスによれば、人格價値の一般的構造は活動の統一性、活動の多樣性、活動の力强さの聯關に存する（Die ethischen Grundfragen, S. 45）。換言せば人格價値の構造は力强く精力的で且分化され、內容豐かで而も自我に於て統一されてゐる活動及び活動可能性の全體である。而して斯くの如き人格價値の情緖的形成卽ち道德的感情の形成は活動の力强さと內容的充實と統一、總じて自他に於ける深きもの、人格的なもの、人間的なものに對する喜び、誇り、愛、尊敬の

涵養にある。而して又感情はそれ自ら根源的なノエシスとして、卽ち價値志向作用としてそれ自身人格價値を形成する。感情は道德化されることによつてそれ自身力强きものとなり——プラトンのテュモス、勇氣、怒り、羞恥心——且廣さと深さをますことによつてより豐かな感情と統一とをもたらす。總じて深い體驗は限りなき對立を含む緊張した統一を現はしてゐるが感情の深さにも此統一が見られる(Krueger, Die Tiefendimension u. die Gegensätzlichkeit des Gefühlslebens, S. 18 ff.)。愛、畏敬、悲壯或は一般に道德的感情は中の原理に基くものとして何れも此意味の對立の統一を其深さの次元の中に現はしてゐる。

八

我々は人間的實存の根本的な性格として活動性を考へ、これと感情の價値志向性との關係を究明することによつて主觀的存在としての感情の實存論的意味を明かにしたが、次に問題になるのは實存の根本的性格として時間性が擧げらるべきである以上感情の時間的性格の究明である。

さて感情は意識過程として時間的であり、而も純粹持續の形に於て質的發展を營むと云ふことは他の意識過程と變りがない。併し時間は其未來性と過去性の兩契機に從つて自由と必然を共に可能ならしめる場面であり、後者の契機に從つて時間を因果的繼起と解する場合には斯くの如き時間の

被投性に於て感情の著明な特色たる被投性が明かにされる。總て意識の創造的發展と雖も意志によつて左右され得ない時間的生成、生長と云ふ運命性をもつが、感情も深ければ深いだけ斯くの如き被投性をもつてゐる。それは意識全體の自らなる生長と云ふ性格をもつてゐる。ベルグソンが自由意志を動的因果性として見る考へ方にも此種の見方が含まれてゐる(Essai sur les données immédiates de la conscience, pp. 134—135, 167)。斯くて我々は又一方では如何に深い感情でも時の流れと共に薄れゆくことを嘆せねばならぬと共に、他方では惡しき感情の根強さも時間によつて治癒され得る場合の多いことを喜ばねばならぬのである。詩人は愛人の死の悲しみも時の翼に乘つて飛び去ると歌ひ、時は苦痛と爭ひを治癒するとも記されてゐる(Pascal, Pensées, 122)。

感情の被投性は其非本來的な形に於ては現在的過去的感情による心の束縛として現はれる。先づ古來快樂特に官能的快樂は現在的狀態と見做されてゐた。現在の對象、現在の世の中に頽落せる狀態であるとされた。快樂が活動の否定として死の原理と認められたのも斯くの如き現在への頽落に基く。

感情の被投性は又過去との關係に於て明かである。感情と記憶の關係は一つの重要な心理學的問題である。過去の把持にはそれぞれ質的に異る感情が重要な動機として働き、又感情の強度、深さが過去の再生に影響する (Würdemann, Über die Bedeutung des Gefühls, Neue psychologische

Studien, I, S. 526 ff.)。故に我々が過去に囚はれると云ふことは屢々其過去の體驗の感情的決定に基くのである。我々は過去を忘れることを一つの德と考へてゐるのはそれが此樣な過去的バトスの克服なるからであり、此意味でニーチェが考へた如く創造的行爲は過去の忘却を要求するのである。

併し我々は更に感情の未來性に就て述べねばならぬ。先きに述べた如く感情は生命ある狀態として、意識の波動として自由活動とは云はれないが併し價値志向として、而も活動價値志向としてそれ自身一つの活動なると共に又活動價値一般の體驗である。それ故感情は被投性を半面の性格としながら同時に未來性を含んでゐるのである。それは創造へのバトス、機能快感、創造快感と稱せられるものに外ならぬ。これ等の感情は既に萠芽的に子供の遊戯の中に現はれてゐるのであつて、自發的に形態を生產する活動を喜ぶ心理である。我々は又シラーが詩的類型として對照させた「素朴的」に對する「感傷的」感情の中に未來性を認めることが出來る。素朴的感情が現在感情であるとせば、感傷的感情は現實を離れ、理想を求める感情である。それは無限性へのバトスなることによつて同時に未來的努力的である。

併し本來的實存的な感情は單に未來的感情のみでなく、感情の未來性と被投性との本來的な綜合である。本來的實存的感情には過去的現在的感情がそれぞれ重要な契機を成してゐる。レヴィ・ブリュールは感情は社會的生活に於ては表象の進步的なるに對して保守的であり、社會的表象の發展

に伴つて社會的感情は急速に發展せず寧ろそれの桎梏になることを述べてゐるが（Lévy-Bruhl, La morale et la science des moeurs. pp. 243—251）、これは社會的發展に於ける知性の大きな役割りを考へさせると同時に、又知性の投企性と感情の被投性、傳統の破壞とそれの肯定の深い綜合に就て考へさせるものである。尙又感情の過去性は律動の快感となつて現はれる。律動を喜ぶ心は過去の反復、同一なものゝ繰返へしを喜ぶ心であり、斯くの如き喜びは小供の遊戯、勞働、藝術、道德等總ての活動の中に見出され、それは又秩序、規則、變化の中にあつて變ぜざるもの、イデヤの追想の喜びとなつて現はれる。

現在的感情も亦未來性との聯關に於て本來的な被投性を現はすやうになる。素朴的感情は現在的感情である。而してそれは現實、自然、必然への被投性を現はしてゐる。併し一般に素朴的なものを特色附けるのは健康な生命感、力强い活動性である。小供の遊戯は創造的現在である。併し眞のレアリストは自然の偶然的な强制に盲從せずして其絕對的永遠的法則に從ふ。彼は自由を以て自然の法則の全體に服する（Schiller, Über naive u. sentimentalische Dichtung, Schillers philosophische Schriften, S. 409）。それは自由と必然の綜合であり、過去と未來の綜合なる永遠な現在である。フィヒテが道德的確信の感情と云ふものは自由を含む必然、經驗我と純我の調和たる永遠性であつた。我々の行爲は斯くの如き意味の現在性によつて支へられてゐなければならぬ。

九

感情をかく價値體驗の主體性と其時間性の性格に於てそれの存在論的構造を明かにした我々は次に感情の對象性を問題にせねばならない。人間の存在は單に主觀的存在でなくて對象の世界の中に生き、世界を構成すると共に世界に限定される世界的存在であるならば、人間的存在としての感情も亦斯くの如き世界性をもたねばならぬ。如何なる感情も單なる主觀的狀態に過ぎぬものは存しない。價値體驗は主觀の本性の要求と一定の對象の要求の綜合的結果である。而して此樣な感情の對象性は體驗的に證明出來る。私は今或る快感を感ずる時、此快は或る對象に於て、或る對象に對して感ぜられるのである。快感は一定の對象の統覺によつて媒介される限り、「に就て」「に對して」と云ふ對象的性格をもち、斯くの如き性格によつて對象により限定されると共に又對象に情緒的意味を附與する。それ故快はヘーゲルの云ふやうに一方では自我感情として生の原理なると共に他方では對象享樂として己れを否定して一般化され、運命の中へ投げ込まれる。これが快の生より死への辯證法である(Phänomenologie, S. 238—241)。

併し感情は斯く世界の中へ死にゆくことによつて世界は却て感情から生命を得るのである。卽ち感情は世界の中に死ぬことによつて却て生きるのである。感情は思惟と異れる、併し同じく根源的

な仕方で世界を構成する。感情は價値の世界、實踐的世界を構成する。固より感情による價値世界の定立はドクサ的定立、價値判斷、或は廣義のロゴスの協同を豫想するであらう。併しロゴス的存在定立、ロゴス的意味附與は實踐的世界の構成に於ては情意的存在體驗、情意的意味體驗を根柢とせねばならぬ。フォイエルバッハが云つたやうに、我々は愛に於て愛の對象の存在と非存在の矛盾を強く意識する。愛をもたぬ者には存在も非存在も大した關心をそゝらない。同樣に憎しみ、不快を通じて我々は又對象の實存性、對象と自己との矛盾を意識する。要するに愛憎、快苦而してそれに伴ふ意志行動を缺いては一般に存在の差別も精神の形成、個體化も不可能である。世界は斯くの如きものとしては現實的體驗の中に解消出來ぬ超越性をもち、現實的體驗に對して無限な可能性と普遍性の背景として現はれるが、併し世界の現實的構成は單なるロゴスでなくて生命化されたロゴス、情意と思惟の綜合によるのである。

斯く情意の世界と存在の世界、價値の世界と存在の世界とはそれぞれ固有の世界を成しつゝ而も相互限定の關係に立つ。價値は非對象的主體的、存在は對象的客體的として區別される。價値は存在、非存在によつて變化しないと考へられるかも知れない。併し情意に對して働きかけぬ價値、己れの實現を要求せざる價値は實存的價値ではない。價値は存在から、又は存在へ向つて現實的に主體に對し、又主體の中から働きかける。斯くて存在——時間的空間的存在の諸樣態、一般に存在の

認識論的諸範疇は同時に情意的機能を以て實踐的世界を構成する。實踐的世界は主觀の普遍的可能的價値構造と世界の個別的事實的存在構造との相互限定、主觀的情意的力と客觀的環境的力との相互作用の場に外ならない。既にスピノザはバトスの本性を自然的因果的世界に於ける主觀と對象の力的相互限定から說明してゐる。人間の本性は自己保存的自己發展的力の主體であるが、此本性は身體を通じて外の世界によつて樣々に限定され、かくて樣々な感情の差別が生ずる(Ethik, III)。

併し情意の研究(併し主として意志の研究)に場の理論の興味深い適用を暗示したのはレヴィンである(Lewin, Vorsatz, Wille u. Bedürfnis)。レヴィンによれば環境は物、事件の世界なると共に感情的調子を帶び、我々の意志に要求をするものである。だが斯くの如き情意的環境は如何なる構造を有するか。それは單に個々の物、事件の世界ではない。個々の物は一定の力の場、狀勢に於て存在し、其情意的要求性は此狀勢によつて規定される。さて此情勢又は場は第一に心理的場を意味する。意識は單に流動的時間的でなく、種々なる體系、複合形態、全體性の統一であり、對象の要求性は此如き心理的情意的全體性、心理的力の場によつて規定される。世界は心理的場の變化と共に其情意的意味を變化させる。一定の對象に情意が固定すると共に、其對象やそれに關係し、且今迄興味をそゝらなかつた事物が全然新しい興味を呼び起すやうになる。世界は此意味で情意及びそれによつて生命附けられた想像力の「結晶」である。併し第二に事物の要求、價値は外面的場の力によつて規

定される。成程對象が主觀に對して要求をなすと云ふことは其反面既に情意的力、緊張の狀態の存在を豫想するであらう。チョコレートに食ひ飽きた子供はチョコレートの誘惑を感じないであらう。而して斯くの如き主觀的價値體驗の動搖性は一面では情意的價値體驗の價値錯覺の原因なると共に、他面では世界の氣分的變化性、心理的陰影性と云ふ存在論的積極性を表現してゐるのであり、だが又クリューガーの云ふやうに、價値體驗の發展は瞬間的表面的價値體驗より永續的で深く廣い價値體驗の精力を養ふことにあり、世界の價値的理解と構成の過程は情意の此如き實踐的形成過程に外ならぬであらう。併しながら對象の要求性は斯く情意的力を豫想すると共に、それ自身の性質による要求性であり、斯くて價値體驗は對象的に限定される。だが此對象の要求、價値は同時に外面的場の力によつて規定される。例へば目的手段の實在的關係によつて或る對象が價値をもつ場合の如き。

だが斯くの如き情勢は個々の情勢から社會的歷史的情勢にまで一般化することが可能であり、世界は此如き普遍的情勢に於て存在し、個物の價値體驗の變化も――土地の價値と貨幣の價値の轉換――世界情勢によつて規定される。これ物理學的場の概念の心理學的應用も遂に心理學としての限界を脫せず、歷史的社會的場の理論によつて具體化されねばならぬ所以である。經濟的政治的道德的一般文化的乃至階級的民族的諸力の牽引、反撥の關係、これこそ價値體驗を擔ふ世界的場の力學

に外ならぬ。

斯くて我々は感情を社會的存在たる人間の有り方、價値體驗の仕方として理解せねばならなくなる。だが此爲には我々は最初に提出した感情の主觀性と云ふ見地に重大な訂正を加へねばならなくなつた。蓋し我々は考察の便宜の上から感情を專ら自我感情として考へて來たが、我々は今感情を社會的意識の一つとして考へねばならなくなつたからである。感情が世界情勢的に規定されると云ふことは感情が個人性を脱して社會的に一般化されることに外ならぬ。此如き社會的感情はデュルケムが考へたやうに、一般に社會意識に固有の超越と內在の特質をもつてゐる。それは自我感情を滿たし、それの中に內在すると共にそれ以上の超越性をもつ。人間は集團的感情によつて個人としては感じ得ぬ普遍的價値、創造的價値を感じ、實現し得る力をもつ。

さて集團的感情が——固よりそれが孤立してでなく、意志、表象との聯關に於て——社會の宗敎、道德、風習の源を成してゐることは明かである。例へばデュルケムは、トーテム宗敎に於て如何に原始人の昂揚した集團的熱情と生活力の體驗とが此宗敎の情意的根源を成してゐるかを述べてゐる(Les formes élémentaires de la vie religieuse, pp. 308—315)。尤も斯くの如き集團的情熱的行動も或る程度の秩序とリズムをもつ點に既に情熱と知性との關係が見られよう。さて此樣な集團的感情は一定の社會的環境を存在根據とするが、尙感情の形成過程として重要なことはそれが常に一定

の對象的表現をもつことである。卽ちこれらの情熱は物的象徵、換言せば一定のトーテムに限定される。それぞれのクランは斯く體驗の物的表現たる種々な名、象徵をもつことにより其集團的統一を客觀的に明かにする。これが傳統の起源である。傳統は集團の情意的想像的表象的諸作用の對象に於ける綜合的な自己表現、結晶に外ならぬ。

併し社會は單に集團的全體ではなく、個人を生むもの、而して又個人間の關係、所謂我と汝の關係を含む。社會は個人を否定すると共に個人を生かすものである。自他合一の一體感として特色附けられる原始人的社會意識と雖もデュルケムによれば、それは個人を自己の中に全部呑み盡す「リヴァイアサン」ではない。寧ろ原始人にとつてはトーテムは彼の生活を高め、彼自身の本性と見做された。マクドガルは自愛的感情(積極的消極的)が如何に社會的に制約されて發生するかを述べてゐる。自愛的感情は未開人に於ても小供に於ても社會が彼等の行爲を賞讃し、否認する時に起る(An introduction to social psychology, VII)。社會的輿論に對する尊敬と恐れとが人格價値感情發生の環境をなしてゐる。集團的意識特に集團的感情は一方では恐るべき破壞性と墮落性とをもち、此點でリヴァイアサン的性格をもつが、併し時代の創造的轉換期に大きな理想、價値發見と創造に驅り立てるのも「よびさます全體性」としての集團的感情、理知と意志とに媒介された創造的感情であり、こゝから新しい個人の自覺が生れるのである。

斯くの如き個人と社會との相互依存の自覺のパトス的表現が愛である。愛は既にプラトンによつて說かれた如く、有限者の結合による無限への憬れである。而して愛は明かに感情である。愛を感情と見ない人は、感情を單に快不快又は一時的表面的感情と考へるからである。併し愛は智慧や意志に盡きるのでなく、それらを包む而もそれ以上の人格の存在の狀態である。此意味で愛は心術に屬すると云ふことが出來る。愛は深さと廣さとをもつ人格の情緒的存在の仕方である。而して感情としてはそれは多くの感情傾向を統一する全體である。愛は愛の對象が現にある時は優しい情を、危險にある時は恐れ又は不安を、脅かされる時は怒りを、それが失はれる時は悲しみを等々多樣な感情を體驗させる源である。斯くの如き愛の複雜な多面性、單に感情のみでなくあらゆる想像と智慧と行動とを呼び起す全體性、「戀愛論」の著者が「無數の星によつて構成された輝かしい堆積」と呼んだ複雜性に愛の魅力が存すると云ふことが出來よう。併し愛の根本的特質は我と汝の創造的全體性の中に於ての分裂と統一の體驗にある。而して此體驗を通じて我と汝の人格が新しい生命を獲得する。愛は此意味で如何なる感情にもまして創造的である。それは汝並びに全體性に於ける自己否定的自己肯定であり、プラトンが指摘した此如きエロースの辯證法的構造は社會的價値體驗と創造の根本特色に外ならぬ。